甲状腺外科草子 158

人生を狂わせる本

杉野　圭三

新刊書籍の情報は新聞、週刊誌、月刊誌の広告や書評、書店の陳列棚で得られるが、興味を引くものは少ない。「世界の名著」などと銘打った本も買うことはなく、立ち読みで充分である（スミマセン！）。

これらの中では「古書店のオヤジが教える世界の名著 70 冊」、「定年後に読む不滅の名著 200 選」などの視点、撰者、解説が面白い。

2025 年 4 月 6 日の讀賣新聞を読んでいると、**三宅香帆**女史の特集記事が出ていた。京都大学文学部在学中に京都天狼院書店の店長に就任し、TV 番組の「プレバト」などにも出演する注目の評論家である。

この記事に紹介された「**人生を狂わす名著 50**」のタイトルが気に入り、早速書店でページをめくり巻頭の文章で完全に引き込まれた。

私にとって、読書は、戦いです

人生を振り返ると、自分で思いもよらなかった選択をするとき、いつも傍らには本がありました。役に立つとか立たないとかよりも、もっともっと大きな、遠くを見させてくれる存在として「本」に触れていただけたなら、これからも生きてくけっこう大変な人生を、一緒に戦ってくれるような本を、見つけていただけたなら、私としては、これ以上幸せなことはありません。

「これは、買わなければ」と迷わずレジに直行した。

三宅女史推薦の本と秀逸なコメントを紹介する。

高慢（自負）と偏見（ジェイン・オースチン）

脚注で「人生の『笑い飛ばし方』がわからなくなったあなたへ」とある。

古典とよばれる作品は、いかに人間が立派でないか、立派になることができないのか、を教えてくれるから古典たり得る。ここに描かれているのは、ご立派な訓示でも生死を巡る葛藤でもない。

月９ドラマも今時放映しないくらいベッタベタなラブ・コメディなのだ、

理想ばかりを見るのでもなく、だけど現実から目を逸らすのでもなく、たはは、と笑いながら、私たちは現実を生きていける。小説によって養われる知性とか教養というものが人生を豊かにするとすれば、きっと、そういった何かを許せる笑い方を身につけるから、なんだろうと思う。

眠り（村上春樹）

村上春樹なんて、正直、好きじゃなかった。

こんなことを言ったら「非国民め！」と叱られそうだから大声でいわないけど、でも本当だ。

「村上春樹？うーん何か苦手～」という人がいたら、その人に村上春樹を読んでもらえればな、という気持ちで、ちょっと『こうして好きになった、村上春樹！』というお話をしたい。

図書館戦争（有川浩）

この世で心から憎んでいるものが二つある。

つまらない本とつまらない読み方をする人である。

エンタメとしてのおもしろさと物語としての強度をここまで両立させた物語、なかなかないもの。きっとあなたが新入社員だったり新入部員だったりするとき、組織に入ってあれこれ悩んでいるとき、この本をよめば頑張ろうって思えるよ！

「**人生を狂わす名著 50**」には、サリンジャー、モーム、漱石、カズオ・イシグロだけでなく、恩田陸、米原万里、俵万智などの作家が取り上げられ、興味を惹かれ人生が狂いそうになる本がいっぱいだ。

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2025 年 11 月 6 日